



六甲カトリック教会 教会報

7

No. 607



出向いて行く教会

主任司祭 英 隆一朗, s. j.



私たちの教会がどのような教会をめざしていくのか、それは「六甲教会の祈り」第3段落に明示されています。「教皇フランシスコ（写真）が求めている『出向いて行く教会』を実現する勇気をお与えください」とあります。残念ながら、この2年間、出向いて行くどころか、教会に来ることすら自粛をお願いするような事態が続いていました。閉じ込めざるを得なかった教会から、少しずつ出向いて行く教会を実現していきましょう。

教会が単なる建物を意味しているだけならば、教会が物理的に出向いて行くことは無理でしょう。しかしながら、教会を共同体として捉えるならば、出向いて行くことは可能だと思います。「福音を求めている人、助けを必要とする人、困難な状況に置かれている人たち」（第4段落）を気かけ、何ができるかを祈り求め、「手を差し伸べて」（第4段落）小さな実践を積み重ねていくことで、出向いて行く教会が実現していくでしょう。

現状の中で、小さなことから始めます。まず、第4日曜日 11:30 のミサは、子どもや少年少女が積極的に参加できる子どもとともにささげるミサを再開します。6月と7月にやってみて、良さそうならば9月から定例化したいです。子どもや若者がもっと自由に集まれる教会になってもらいたいです。また、第1日曜日 11:30 のミサは手話付きミサを行って、障がい者が自由に参加できるミサを行う予定です。7月と8月にやってみて、良さそうならば定例化していきたいです。聴覚障がい者の方だけでなく、さまざまな障がいをもつ方が集まるような教会になるとありがたいです。このような特別ミサは、地区割りに関係なく、関係する方々が自由に参加できます。

現在は日本人信徒が大多数ですが、外国人の方々も集まってくるとすばらしいと思います。「地域・文化・言語・社会的立場の枠をこえて」（第3段落）、多種多様な人びとが誰でも集まれる教会をめざしていきたいです。

ゆるしの秘跡は、信仰生活にとって必要不可欠なものです。コロナで自粛してきましたが、定期的に再開する必要があると思います。日曜日 9時30分から10時までの間、小聖堂にて司祭が待機していますので、ゆるしの秘跡を望む方は小聖堂に順次お入りください（7月第1日曜日より）。

また、ミサの祈りと賛美を少しずつ本来の姿に戻していきたいです。感染状況を見ながらですが、少しずつ緩和していくつもりです。7月から、大人の侍者や聖体奉仕者が少しずつ参加する予定です（具体的な変更点は典礼部と相談して、順次お知らせします）。

《 教会財務報告会 》



コロナで中断していた教会の「財務報告会」を6月12日（日）と19日（日）の11時30分ミサ後、2年ぶりに2回に分けて行いました。財務担当からは、コロナ以前の2018年度、2019年度とコロナの影響を受けた2020年度、2021年度の収支比較を説明しました。当然ながらコロナの影響を受けたのはミサ献金で、全体の収入減の多くを占めました。支出の方も減額になり、当期利益ではさほどコロナの影響を受けない数字となりました。また施設

管理部の担当者からは、多数の課題があるが、今年度は①司祭館（3階）の空調の改修、②ベルタワーの十字架の修復、③敷地内の樹木の整備と管理の3事業に焦点を絞って、事業実施に向けた検討を始めていることの説明がありました。（記：財務担当・蛭田 武）

（写真はプロジェクターに映しだされた2018～21年度の主要項目収支実績）

《 新受洗者、転入者の方々への説明会 》

6月26日（日）11時半ミサ後、コロナで長い間中断されていた「新受洗者、転入者の方々への説明会」が開かれました。出席は新受洗6人、転入者9人、受け入れ地区会の世話人の方々など含め、イグナチオホールいっぱいの総勢30人を越える大きな会議となりました。進行は宗行小教区評議会議長、「六甲教会のしおり」を使って概略説明され、英主任司祭は信徒としての心得、共同体としての教会活動の紹介など、懇切丁寧に教会生活の基本を説明されました。出席メンバーからは、趣味の会やボランティア活動の説明勧誘などもありました。後半はそれぞれの所属地区会の方々との交流となり、短い時間でしたが新しいお仲間との絆が深まりました。（写真中央から右側に新受洗者、転入者の皆さん。左端 宗行議長、その隣に英神父）



今月の聖人 福者 ペトロ岐部

7月1日はペトロ岐部の記念日とされています。正確に言うと、福者ペトロ岐部と同志殉教者（日本188福者殉教者）の記念日となります。2008年に教皇ベネディクト16世が禁教時代の日本の188人の殉教者を列福しました。その中にイエズス会の会員4人（ジュリアン中浦、ディオゴ結城了雪、ニコラオ福永ケイアンとペトロ岐部）が含まれています。

ペトロ岐部（本名岐部茂勝）は1587年大分の生まれ、両親も熱心なキリシタンでした。1597年には長崎で26聖人の殉教、1622年には同じく長崎で「元和の大殉教」と言われる55人の殉教があり、彼は過酷な禁教時代に生まれ育ち、その中で宣教を重ねました。

1614年、ペトロ岐部は追放された宣教師とともにマカオに渡り、さらにエルサレムからローマへ向かいました。ローマでイエズス会の修練院に入り司祭に叙階され、1630年に日本に帰国しました。フェレイラ管区長の棄教を経験しながらも、近畿や東北で宣教を続けましたが1639年捕らえられ、江戸に護送されます。宗門奉行井上筑後守が將軍家光に宛てた報告書には「キベヘイトロは転び申さず候、ツルシ殺され候」（原文のまま）とあり、この時代のキリスト者の殉教は驚くほど悲惨でまた多数に上っています。（写真は大分県国東市にあるペトロ岐部の像）



♪ 6月5日「祈りと音楽の集い」 ♪

ゲストをお招きしての「祈りと音楽の集い」がひさしぶりに開かれ、教会内だけでなく首を長くして待っていた「ファン」がおおぜい来られました。演奏者の川越聡子さんご本人から心のこもったコメントをいただきました。ご紹介します。



聖霊降臨の主日（6月5日）の『祈りと音楽の集い』にて、バッハと、フランスそして日本の聖霊降臨祭のオルガン作品を演奏させて頂きました。外部の演奏家を招いての開催は2年ぶりとの事でしたが、アシスタントを務めてくださった三浦さん・松井さん、聖歌・コラール唱の西川さん・高山さん、プログラムとスライド制作の橋岡さん、そして送迎と美味しい神戸のパンを調達して下さった清水さん等、教会の音楽チームが一丸となって作ってくださった『集い』でした。

六甲教会のオルガンは、元々は北ドイツ・バロックタイプの楽器のため、フランスの独特な音色や音楽語法がうまく表現できるか（自分で選曲しておきながら！）少し不安に思っていたのですが、日々のミサを支え、よく弾き込まれた辻オルガンの懐は想像以上に深く、無茶な要求も驚くほど応えてくれました。

また、当日の朝のミサに出席した際、聖霊の恵みのシャワーが頭と背中に注がれるような、不思議な感覚を味わいました。それを保持したまま、聖霊降臨の曲を演奏させて頂けた事は、この上無い貴重な体験です。英神父さまほか、教会の全ての皆さまに感謝申し上げると共に、また神戸に伺える日を楽しみにしております。（川越聡子・オルガニスト）

《 こどもミサ復活 》

6月26日（日）の11時半のミサはひさしぶりに「子どもとともにささげるミサ」でした。侍者、朗読、共同祈願もこどもたちがつとめました。ハキハキとした先唱、ピチピチと一生懸命の朗読や共同祈願、ハレルヤは「心を合わせて」から、ギターなどは入りませんでしたがオルガンに合わせてみんなが歌いました。コロナでずっとお休みしていた「こどものためのミサ」は、6月、7月にテストケース、うまくいけば9月から定例化する予定だそうです。コロナが息を吹き返さないように…



私の好きな聖書の言葉（第2回）



愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。
(コリントの信徒への手紙 13・4-7)

この聖句の意味をもっと知りたいと思い、本など読みました。ある本には、「愛」の代わりに「自分」を入れてみると、いかに自分を愛せていないかよくわかるとありました。また他の本には、そこに「イエス様」と入れてみると、どれほどに私たちは愛されているとわかると書いていました。こんなに愛されているのに、あまりに不完全な自分を知りました。でもだからこそ目指すべき方向を目指したいです。この聖句のように、誰かを大切に思う気持ちになりますように。 鶴田 幸

ラルシュかなの家訪問

6月17日(金)久しぶりに"ラルシュかなの家"を訪問しました。私とかなの家との出会いは、2008年に遡ります。当時、片柳神父さまが、教会の若者をかなの家に連れて行って下さり、かなの家の障がいを持つ仲間たちと一緒に作業をして寝食を共にし共に祈る機会を与えてくださいました。その若者の中に私の娘と息子も入っていました。

帰宅後、二人からかなの家の仲間の純粋さ、やさしさを肌で感じてきたことを聞き、神父さまからかなの家の仲間が作っているせっけんを教会でも広めたらどうだろうか、という話を持ちかけられ、始めは当惑したものの、これも与えられたお恵みかと思い、毎月第3日曜日10時ミサ後、イグナチオホールでせっけんを売り始めました。

そして、ある秋の六甲教会チャリティーバザーの時に、かなの家の仲間3人が自ら教会でかなの家のせっけんや、製品を売って教会の信徒の人たちと交流をはかりたいと思い立ち、アシスタント1人が3人を連れて来られました。バザーは始まりが朝早いので、静岡から来るのは大変なので、前の晩から私の家に来て夕食を共にし、お風呂に入って、翌朝一緒に教会へ赴きました。そのバザーの時に、教会の信徒たちとかなの仲間との楽しいふれあいがああり、支援が今日まで続いています。

私が訪れたラルシュかなの家には、現在、26人の障がい者と15人のアシスタント、合わせて41人が共同生活を営んでいます。私がかの家に着いた時は、ちょうど昼時で仲間たちから大きな拍手、踊り、歌などで大歓迎され、涙が出るほど嬉しかったです。屈託のない明るい笑顔、彼らのほうが私より純粋で神に近い存在かもしれません。自分たちの生活を支えるためにできる範囲で一生懸命石鹸づくりや、畑仕事に取り組んでいます。仲間たちの平均工賃は月に15,000円程度。年金と工賃でなんとかやりくりしているものの、彼らには暗さが全く見られません。そんな彼らから感じるもの、教えられるものは非常に大きく、富や権力争い、戦争の世界に対して、このラルシュはまさにその反対で天国のようです。みんなが食事の時に集まる建物の他に、3つのグループホームがあり、そこでそれぞれ夕べの祈りの時間があるそうです。

しかし、コロナ禍とウクライナ・ロシアの戦争の影響でせっけんの主原料とされるヤシ油、大豆油が高騰し、製品価格を上げざるを得なくなっています。そんな中であっても仲間たちはアシスタントと共に地球環境問題に取り組み、未来に向けて洗剤の容器をプラスチックから紙包装に変えた製品を考え抜いて作りだしました。コロナ禍以前は毎月第3日曜日10時のミサ後、イグナチオホールで喫茶と同時に売っていましたが、今は不定期ですが、聖堂外でかなの製品を販売していますので、昔と相変わらず、ご支援のほどよろしくお願い致します。六甲教会の祈りにも記されているように「谷間に置かれている人」に目を向け「開かれた教会」として、皆様と共に歩んでいきたいと思ひます。 井川伸子



2022年静岡駅近くの広場で出店している
アシスタントと仲間たち
（「ラルシュかなの家便り」2022年夏号より許可を得て転載）

◆ 社会活動部より ◆

7月9日(土) 10時 炊き出し 社会活動神戸センター外の台所（神戸中央教会敷地内）
小野浜グランドにて、おじさん達のお話相手や配食だけでもOKです。
7月25日(月) 9時半～ ともしび会 イグナチオホール台所で児童養護施設へのケーキ作り

《 図書室からのお知らせ 》

お待たせしていたパパ様の本です。

☆ 教皇フランシスコ コロナの世界を生きる

教皇フランシスコ PHP 研究所

教皇フランシスコが、自身が病気やさまざまな出来事に苦しんできたことをふまえて、コロナ禍で苦しむ人々に救いのメッセージを贈る。

以下、神父様、信徒の方からいただいた本の一部です。

☆ JESUS イエス あなたはいったい何者ですか

パゴラ・エルロサ・ホセ・アントニオ

訳：フォスト・セグラ 加藤喜美子

ドン・ボスコ社

燃えたぎる情熱に彩られた美しきイエス＝キリストと出会う喜びがみなぎる、誇らしき回覧板。著者から監修者や翻訳者を経て読者にまで届けられた本書を一読して本当に爽快な気持ちにさせられ、思わず人に薦めずにはいられない。・・・——巻頭にある阿部仲麻呂神父の推薦のことばより

☆ 禅とキリスト教

クラウド・リーゼンフーバー

知泉書館

数十年座り続けてきてこの3月3日に亡くなられたリーゼンフーバー師が「座り、無心になり、背骨を伸ばし、心を真すぐに、意識と呼吸を一つにして自分自身を見つめることにより、大いなるものとの出会いがあり、信仰の神秘と救いがもたらされる」と語ります。その出会い対話を語り、読者を誘います。

☆ 魂をもてなす

中村佐知

あめんどう

英神父さま推薦のことば 「霊的同伴の入門書として最適です。」

「霊的同伴」とは その目的は 祈り・実践への心の準備を…

☆ がんになった緩和ケア医が語る「残り2年」の生き方、考え方

関本 剛

宝島社

この4月19日に亡くなられた関本剛先生は、「残り2年」と自らが肺がんで宣告を受け、さらに脳に転移。これまで自らが相手にしてきた患者さんの立場に。母上の緩和ケア医としての姿を見て選び進んだ道。「死」について、家族の今後… 死後の世界 ポジティブな生き方を 患者さんたちに みんなに。

《お願い》 教会に図書を寄付・寄贈される方は、信者や教会図書室利用者に、その図書の推薦文や、教会図書室に相応しい旨のアピールを添えて事務所にお申し出ください。

またお気付きのこと、希望の図書等、遠慮なくお知らせ下さい。

教会のご近所訪問 喫茶コリス

六甲登山口交差点から少し下った一角、茶色のタイルの装飾のビルの一階にあります（お隣は六甲学伸塾という学習塾）。今年の1月に開店しました。ベージュ色の



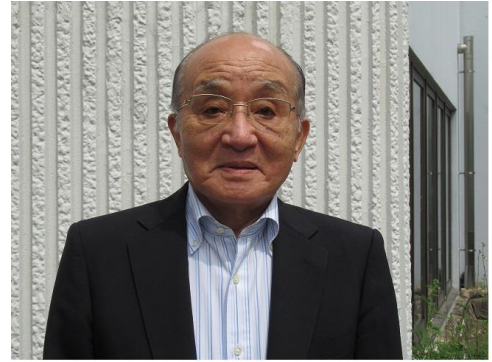
木の引き戸を開けると大きな窓から入る日差しを受けて明るい店内、店主の「なお」さんが丹精

込めた「デンマーク刺繍」の作品が壁に飾られています。これがみごとにマッチしてお店の雰囲気を引き立てています。ウッディなテー

ブル席とカウンター席、出されるコーヒーカップやお皿は、ジノリ、ウェッジウッド、ロイヤル・コペンハーゲンなど、ご主人の海外駐在時代に一緒に集められたコレクションをさらりと並べてくれます。季節のお花が活けられ、華やかでアットホームな喫茶コリス。無造作に片仮名でコリスと名乗っていますが、コリスは子（小）栗鼠（リス）のこと、さりげなく立て掛けられたリスの絵がマスコットです。厨房から客席はすぐ近く、お話好きな「なお」さんとの会話もはずみます。自家製ケーキや自家製カレーなど軽食もオーケー。月曜日と火曜日が定休日です。



私は中学、高校、大学および会社で計 15 年間サッカーに夢中になりました。中学、高校の 6 年間は一貫教育の学校で、規律が厳しく私生活に関してもチェックされましたので、徐々に別次元の世界で生活しているようで、むらむらした気分になり、その解決策を考えた結果、スポーツをする事で解決できると考えました。長距離走に興味があったので、陸上競技部に入部する事を考え、人望厚い知人に相談したところ、知人は個人競技より団体競技をする事を勧めたい、その訳は個人競技より団体競技の方が仲間と親密になり、意思疎通がはかられ連帯責任が生まれるのでチームワーク向上に繋がり、人格向上に役立つというのです。知人はサッカーも走る事が主なので、サッカーを勧めたいと言われて、それもひとつの選択肢だと考えた結果、サッカー部に入部する決心をしました。



入部して仲間と一緒にサッカーをすればするほど仲間との絆が強くなり、面白くなりはずなりましたが、練習、試合に没頭しました。勉強も成績が極端に下がらない様努力しました。私と一緒に入部した時の同期生は 5 人で、5 人とも練習熱心でレギュラーの座を獲得し、その座を死守するために切磋琢磨しました。学校は勉学中心の進学校で、そのためか練習の日および時間が制限されました。それが良いか悪いかは別として、制約された環境の中で集中して、密に練習しました。部員が少なく、少ない練習時間の中、指導力と技術力両面を兼ね備えた素晴らしいスペイン人の監督の下、熱心に練習しましたので、兵庫県で我が校はかなり強いチームに成長しました。今でもその事を自慢したいです。



大学時代は弱いチームでしたので、あまり記憶に残っていません。

会社では 5 年間、選手兼マネジャーとして活躍しました。当時のサッカーはまだ歴史が浅く、サッカーをする学校及び選手は少なく、また人気の無いスポーツでした。いまは男女を問わず絶大な人気を誇るスポーツと化しましたが、昔は女子サッカーは存在せず、またプロも存在しませんでした。ポジションは固定化され選手交代は出来ませんでした。反則とか負傷で退場した場合、補完は出来ず少ない人数でそのまま試合を続けなければなりませんでした。延長戦で決着がつかない場合、今は PK で勝敗を決めますが、昔はジャンケンで勝負を決めるのがルールでした。

サッカー人生で良い思い出と悔しい思い出があります。悔しい思い出は高校 3 年の時、全国高等学校サッカー選手権大会に出場する兵庫県代表を決める県大会予選の準々決勝で、県立兵庫工業高校と対戦して引き分けの末、ジャンケンで負けた事です。今でもその悔しさを思い出します。良い思い出は、社会人早々でサッカー部に入り、2 年後に大阪実業団リーグ 2 部で首位となり、1 部最下位チームとの入替戦で勝って、1 部リーグに昇格した事です。その時は嬉しかったですが、1 部リーグの各チームは強者揃いでレベルが高く翌年、残念なことに負け越してしまいました。5 年後に転勤と仕事が多忙になり、サッカーをやめました。会社リタイア後は加齢とともに体力が衰えてきたので、サッカーのあと続けていたスキー、ダイビングやゴルフはやめました、今でも軽いウォーキングと体操は続けています。

§ 改悛者・巡礼者としての歩み

ナバラ侯爵の説得も兄の勧めにも耳を貸さず、1522年ロヨラの城門を出て長い巡礼の旅に踏み出した。断食、苦行、むち打ち、徹夜の祈りなど、厳しい生活を自らに課しつつも、聖フランシスコや聖ドミニコに負けぬものかという人間的な競争心を持っていた。先ずはエルサレムへの巡礼を目指し、その後にはブルゴスの厳格な聖カルトジオ会への入会を少し考えたりと迷うことも多かった。また自叙伝によると、幼子イエスを抱いたマリアの出現に浴したという。神は、今後どのような歩みを期待されるのか。

イグナチオは道すがら、モール人と論争になり口バの歩みによっては、マリアの名誉を守るためには彼を切り殺す事も厭わなかった。モンセラットでは聖母の祭壇の前で夜通し祈り、武器と武具を脱ぎ捨てて巡礼者の装いを身に着け、マンレサへの道を急いだ。かの地こそイグナチオにとって、またひいては全世界にとって決定的な出来事が起こった。そのカルドネル河畔における神秘体験によって、彼はすっかり生まれ変わり、キリストの兵士としてひたすら神に仕えることこそ生涯の望みとなった。この体験を経て、何をどのように黙想するのか（霊操）、また日常生活の中で善霊と悪霊の動きを見分け、神のみ旨を識別して選定する方法を、みずから習得したのである。彼の望みはひとえに、エルサレムに巡礼し、願うらくはイエスの大地に住み着き、改悛

者として奉仕の生涯を隠れて送ることであった。しかしながら聖地の守護者として教皇から全権を委任されているフランシスコ会の長上



は、熱心で殉教の死も辞さない覚悟を持つイグナチオに或る危なさを感じたのか、滞在を許さなかった。彼は従順にエルサレムから退出し帰国の途についた。彼はこれから何をするのか、何処に行くのか模索の日々が続くのである。

§ 学究の徒としての歩み

聖なる奉仕によって人々を助けるために、イグナチオはどうしても学問の必要を感じ、晩学ではあるが彼はバルセロナで文法を学び始めた。さらに哲学を学ぶためにアルカラに移ったが、彼の厳しい苦行と貧しい人々への奉仕は誤解され疑われ、何と宗教裁判所に42日間も抑留された。同じ嫌疑をサラマンカでもかけられ、遂には故国を後にパリに向かって旅立つことになった。パリ大学で苦学生として勉学に励みながらも、将来の同志たちとの貴重な出会いの時が与えられ、彼らの養成のために大いに心を砕いた。

「すべての聖徒よ、主を愛せよ。主は真実な者を守られるが、驕りふるまう者にはしたたかかに報いられる。すべて主を待ち望む者よ、強くあれ、心を雄々しくせよ」。



【2022 年 7 月行事予定表】

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
					初金曜日ミサ 7:00 10:00 聖体顕示 10:00 ミサ後 福者ペトロ岐部司 祭と 187 殉教者 ◎東灘北 1	
3	4	5	6	7	8	9
年間第 14 主日					◎東灘北 2 ・ 芦屋	社会活動部 炊き出し
10	11	12	13	14	15	16
年間第 15 主日 小教区評議会					◎東灘南	
17	18	19	20	21	22	23
年間第 16 主日 地区役員会 ◎日曜班					聖マリア（マゲ ダラ）	
24/31	25	26	27	28	29	30
年間第 17 主日 /年間第 18 主日				◎定期清掃		

◎は掃除当番地区です。

【編集後記】

・英主任司祭の「出向いて行く教会」では早速中村神父が家庭訪問を始められました。高齢や病気で教会に来られない方々のための訪問です。ご家族からは「来ていただいて、とてもよかった」との声が聞かれます。家庭訪問の申し込みは各地区長などを通じて、または、教会事務室への直接申し込みも可能です。

・8 月 6 日の平和旬間には、ミサ後、納涼の夕べの代わりに茶話会を予定しています。秋のバザーも開催の方向で準備が進められています。

次回 7 月号の発行は 7 月 30 日（土）です。 原稿は毎月 15 日ごろまでに教会受付へ直接ご 持参いただくか、FAX やメールでお願いいたし ます。皆様からの原稿をお待ちしています。 あわせてご意見もお寄せ下さい。広報部 http://www.rokko-catholic.jp	六甲カトリック教会 〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21 電話 078-851-2846 FAX 078-851-9023 E メール renraku@rokko-catholic.jp 発行責任者 英隆一朗 編 集 広 報 部
---	---